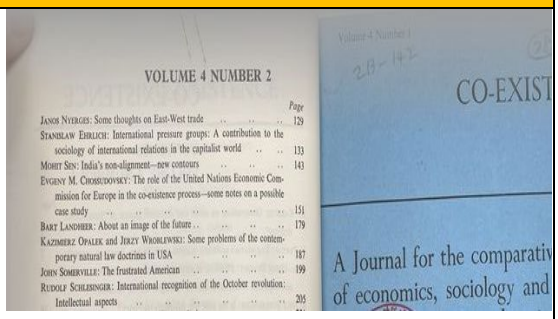
国際社会学部

中山智香子

Nakayama Chikako
現代世界論コース
現代経済思想・社会思想・Global Studies



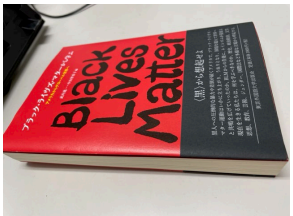
経済思想とは

経済思想とは、歴史上のさまざまな時代に世界のいろいろな場所で、「経済」について考えられ記録された言説を分析する学問領域です。経済に関わる学問領域として経済学がありますが、経済学がみずからを客観的・普遍的・不変の科学と位置づけるのに対し、経済思想はそもそも何を経済ととらえるのか、経済（これは日本語ですが、たとえば英語でいうならeconomy、ドイツ語ならWirtschaft）という概念がいつ、どのようにできたのかなどを考えます。つまり経済学の成り立ちや推移も含めて考察し、相対化する研究領域です。特に現代経済思想では、経済の領域が離床した社会や環境に関する思想、国境を越えた市場経済の拡大と並行したグローバリゼーションを、視野の中心に置きながら考察します。

研究紹介

もとは19世紀後半に成立したオーストリア学派の20世紀前半の展開として、グローバル化と世界戦争の激動期にアメリカへわたってできたゲーム理論の成立をテーマとしました。ここから同時代のカール・ポランニーの思想をおもな研究対象とするようになり、その影響を受けた世界システム分析や、かれが拓いた経済人類学について研究するようになりました。近年は経済人類学の重要な論点として、一方で土地や自然と経済の関係、他方で貨幣に関する論文や翻訳などを手がけています。

(左:訳書の図柄は大戦間期ドイツハイパーインフレ期の緊急貨幣)
(右：外大の先生方と連続セミナーをして記録を本にしました)



(下：博士後期課程共同サステイナビリティ研究専攻の院生、卒業生とセッションを組んで、Global Social Economy Forum 2023 (ダカール)で報告をしてきました。セッション後に参加者たちと共に撮った一枚)

担当授業

- 現代世界論概論
- 世界認識論概論
- グローバルスタディーズ
- グローバルスタディーズ研究
- サステイナビリティ研究基礎
- 協働分野セミナー
- 先端演習

関連する分野

- 哲学・社会思想
- 貨幣論
- 生態経済学
- サステイナビリティ研究

出版物

著書
- 『経済学の堕落を撃つ：自由vs正義の経済思想』
- 『経済ジェノサイド』
- 『経済戦争の理論』

共著
- 『ブラックライヴズマターから学ぶ』
- 『アルジャジーラとメディアの壁』

翻訳（共訳）
- G.F.クナップ『貨幣の国家理論』
- G.アリギ『北京のアダム・スミス』
- E.メルツ『シュンペーターのウィーン』

国際社会学部

グローバルスタディーズ・ゼミ

左：2022年度卒論提出直後の研究室にて
右：2022年度の卒論・ゼミ論等発表会でのゼミ論セッションの一コマ

どのようなゼミか

本ゼミは３年次には共通テーマで共通論考、次に各自のテーマでゼミ論文を完成させ、論文作成や議論の技法等を実践に即して学ぶ。状況が許せば希望に応じてゼミ合宿を行ったり企画を行ったりして思考を深め、年度末までに一冊の論考集を作成する。最終年度にはそれまでの実践と研究を通じて得た知見を活かし、およそ一年間をかけて卒業論文を準備、完成する。

グローバリゼーションを多角的に分析するグローバルスタディーズの切り口は、学際的で多様である。担当教員の専門領域は19世紀の終わりから現代までの思想史である。この時期は資本主義の進展によりグローバリゼーションが進行し、世界規模の戦争や世界大恐慌など負の側面が顕在化した時期でもある。100年ほど前に未解決だった諸問題が現代に再起しているようだが事態はさらに複雑だ。

ゼミでは基本的な枠組をふまえた上で、各自が追究したいテーマをみつけ、研究を進めていく。「自由に」テーマを定めるのは一見そう思うほどたやすくないが、それ自体も思考と研究のプロセスである。頭が壊れるぐらいまで考え、語り、書いて脱皮していく。この快感はクセになる（なお頭はそう簡単に壊れないのでご心配なく）。留学、休学なども含めみずからの求める方向をよく考え、随時教員やゼミ生らと相談しながら、好きに進んでいけばよい。

卒論

- 「救国」のはざまで：長谷川テルの対日ラジオ放送とその背景思想を考える
- 平和への闘争：ベトナム戦争禍のティク・クアン・ドゥクとアリス・ハーズの焼身抗議
- 「不寛容」を肯定する：文化相対主義の整理とその考察
- 「ファクトリー」を出入りする若者たち：マンチェスターにおける労働者階級、音楽とドラッグ

おススメの本

- Ｋ.ポラニー『大転換：市場社会の形成と崩壊』
- Th. ポーター『数値と客観性：科学と社会における信頼の獲得』
- 石牟礼道子『苦海浄土』
- Ｇ.アリギ『長い20世紀：資本、権力、そして現代の系譜』
- R.ソルニット『オーウェルの薔薇』

「このグローバル社会の諸問題は常に複合的であり、学問の枠にとらわれずに手探りで問題と向きあわなければならない。既存のレンズにとらわれない自分なりの問題提起を、泥臭くみっともない姿をさらしながらも、凝視し続け丹念に積み上げていく作業が不可欠である。（中略）本ゼミの中で行うすべての活動には正解が無い。そのため周りの期待に応え、耳障りのいい言葉を並べる「いい子」は必要ない。…」
（「学生によるゼミ紹介　現代世界論コース　中山智香子ゼミ」より